

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

How did Nightingale form her nursing philosophy between 1840s and 1850s, and establish a modern nursing?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳永, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000170">https://doi.org/10.15019/00000170</a>

著作権は本学に帰属する。

## 報告

# 1840-50 年代におけるナイチンゲールの看護哲学と近代看護の形成

徳永 哲<sup>1)</sup>

ナイチンゲールの思想は、1842 にプロシアの特使ブンゼン男爵と知り合いになった時点から急速に進歩、深化した。ブンゼン男爵の豊富な知識は、神学者でありながら異端者として火刑に処されたブルーノやエックハルト、さらにネオ・プラトニズムにまで及んでいた。また、ドイツのカイザースヴェルト学園の情報誌などを届けてくれたのはブンゼン夫妻であり、彼を通して知った宗教思想や哲学はナイチンゲールの看護への意志を支え、励まし続けた。

1840 年代後半になると、ロンドンにはプロテスタントとカトリック双方の女子修道会が発足し、貧困者の救済に修道女が活躍するようになった。ナイチンゲールは特に看護修道女の活動を知るようになった。クリミア戦争ではナイチンゲールを支えて献身的に働いた看護修道女のフライやマザー・ムーアから、彼女等の看護への意識の高さを思い知らされた。その一方で、キングス・カレッジのポーマン医師の外科手術に立ち会ったことから医療技術の進歩に直面し、病院看護の新しい方向性を見出す切掛けとなった。また、彼女が自発的に習得した公衆衛生学や統計学の知識は近代看護の確立基盤となった。宗教と科学、この矛盾したものがナイチンゲールの思想の中には一体となって存在し、近代看護は生み出されたのである。

**キーワード:** ブンゼン男爵、カイザースヴェルト学園、看護修道女、病院看護、近代看護

## I 緒言

2010 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告論文『ナイチンゲール、1842 年から 1854 年までの成長の軌跡 —エンブリーとリーハースト及びロンドンでの出来事を基にして』で、著者は、第 1 章でナイチンゲールが看護の勉強のため、両親に内緒で通っていたソールズベリー病院を発見し、報告した。第 2 章でアメリカの博愛主義者サミュエル・ハウと世界最初の女医エリザベス・ブラックウェルとの対話によって、失意のどん底にありながら、ナイチンゲールがいかに励まされ、自己の人生にささやかな希望を得ることができたかを論じた。第 3 章では、ロンドンに拡大する貧困層と深刻化する環境汚染と疫病の蔓延のなかで、ナイチンゲールは 1840 年代後半に急速に発達した外科手術や公衆衛生学、さらには統計学などを積極的に学び、感染症予防策や死亡原因を模索、解明しようと努めた。その一方、従来の医療及び看護のお粗末な実態を知った。クリミア半島に向う前に、すでに彼女の頭の中には新しい時代の医療に対応する看護が構想されていたのである。

今回 2011 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告論文は、ナイチンゲールの看護を支えた思想的背景

に迫った。1840 年代から 1860 年代にかけてのほぼ 20 年間はナイチンゲールの看護哲学が形成された時期であった。彼女の思想の基盤はキリスト教信仰であったことは事実であるが、その信仰のあり方は複雑で、難解である。無教会派のユニテリアンであった父はケンブリッジ大学卒業後エジンバラ大学で医学などを学んだ。その父自らが科学や宗教学や哲学の基礎的な知識を若きナイチンゲールに伝授した。だが、父から授けられたものは知識だけではなかった。父の自由な生き方や何事にも深く思索する習慣を受け継いでいたのである。その上に、ブンゼン男爵やすぐれた修道女との出会いがあり、また、語学力を生かして過去のすぐれた思想家を知ることによって、ナイチンゲールの近代看護の基盤となる哲学が育まれていったのである。

## II 研究方法

文献研究

文献は分類し、下記の通り一覧表にして明示した。

- A. ナイチンゲール及び看護学関連の文献
- B. イギリス及びロンドンの歴史・社会関連の文献
- C. 哲学・思想関連の文献
- D. 医療及び公衆衛生関連

1) 日本赤十字九州国際看護大学

[文献一覧表]

関連別	著者(編者)、著者、出版社、出版年など
<p><b>A. ナイチンゲール及び看護学関連の文献</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) Mark Bostridge: <i>Florence Nightingale</i>. Penguin Books, 2008.</li> <li>2) フロレンス・ナイチンゲール著、小玉香津子/尾田葉子 訳 — 看護覚え書き、日本看護協会出版会、2004 Florence Nightingale: <i>Notes on Nursing, what it is and what it is not</i>. Harrison, 59, Pall Mal, 1859.</li> <li>3) セシル・ウーダムスミス著、武山満智子/小南吉彦 訳 — フロレンス・ナイチンゲールの生涯、現代社、1983 Cecil Woodham-Smith: <i>Florence Nightingale 1820-1910</i>. Constable, London, 1950.</li> <li>4) ルーシー・セーマー著、湯楨ます訳—フロレンス・ナイチンゲール、メディカルフレンド社、1963 Lucy Seymer: <i>Florence Nightingale</i>. Faber &amp; Faber, 1950.</li> <li>5) 湯楨ます監修: ナイチンゲール著作集第1巻～第3巻、現代社、1977</li> <li>6) 薄井坦子/小玉香津子/田村真/山本利江 /和住淑子/小南吉彦 訳 — フロレンス・ナイチンゲール看護小論集、現代社、2003</li> <li>7) 榊原正義// 川田一郎 / 川島正幸編注 — ドイツ近代看護の黎明, フリートナー夫妻の生涯、時空出版、2001</li> <li>8) ヒュー・スモール著、田中京子訳—ナイチンゲール神話と真実、みすず書房、2003 Hugh Small: <i>Florence Nightingale Avenging Angel</i>. Constable and Company Limited, 1998.</li> <li>9) ナイチンゲール著、竹内喜 / 菱沼裕子 / 助川尚子訳、小林章夫監訳 — 真理の探究、うぶすな書院、2005</li> <li>10) Michael D. Calabria and Janet A. Macrac (ed.): <i>Suggestions for Thought by Florence Nightingale, Selected and Commentaries</i>. University of Pennsylvania Press, 1994.</li> <li>11) Collected Works of Florence Nightingale Volume 11. Lynn McDonald (ed.): <i>Florence Nightingale's Suggestions for Thought</i>. Wilfrid Laurier University Press, 2008.</li> <li>12) リットン・ストレイチー著、中野康司 訳 — ヴィクトリア朝偉人伝、みすず書房、pp. 5-75. 2008 Lytton Strachey: <i>Eminent Victorians</i>. A Harvest Book, pp.135-203. 1918.</li> <li>13) 多尾清子、統計学者としてのナイチンゲール、医学書院、2004</li> <li>14) 湯浅ます / 小玉香津子 / 浅井坦子 / 鳥海美恵子 / 小南吉彦訳 — 新訳・ナイチンゲール書簡集、現代社、2004</li> <li>15) M・ベイリー/M・J・ブロック/L・モンティロ他著、小林章夫監訳 — ナイチンゲールとその時代、うぶすな書院、2000</li> <li>16) ジョゼフィン・A・ドラン、小野泰博 / 内尾貞子訳 — 看護・医療の歴史、誠心書房、1978</li> </ol>
<p><b>B. イギリス及びロンドンの歴史・社会関連の文献</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) ヒュー・クラウト編、中村英勝 監訳—ロンドン歴史地図、東京書籍、1997</li> <li>2) マルカム=フォーカス / ジョン=ギリンガム責任編集、中村英勝 / 森岡敬一郎 / 石井摩耶子 訳 — イギリス歴史地図、東京書籍、1990</li> <li>3) ヘンリー・メイヒュー著、松村昌家他編訳 — ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会、ミネルヴァ書房、2009</li> <li>4) L・C・B・シーマン著、社本時子 / 三ツ星堅三 訳 — ヴィクトリア時代のロンドン、創元社、1995. L.C.B. Seaman: <i>Life in Victorian London</i>. B.T.Batsford, 1973.</li> <li>5) 角山榮 / 川北稔 編 — 路地裏の大英帝国、平凡社 1998</li> <li>6) レイ・ストレイチー著、来栖美知子/出淵敬子 監訳 — イギリス女性運動史 1792-1928、みすず書房、2008</li> <li>7) P・スノードン編著、櫻庭信之 / 定松正 / 松村昌家 訳 — ロンドン事典、大修館、2002</li> </ol>
<p><b>C. 哲学・思想関連の文献</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) シオバン・ネルソン著、原田裕子 訳 — 黙して励め、日本看護協会出版会、2004 Sioban Nelson: <i>Say Little, Do Much</i>, Pennsylvania Press, 2003.</li> <li>2) 塚田理著—イングランドの宗教、教文社、2006</li> <li>3) 岩波哲学・思想事典、岩波書店、1998</li> <li>4) エックハルト著、田島照久編訳、— エックハルト説教集、岩波書店、2009 Meister Eckhart: <i>Selecting Writings</i>, selected and translated by Oliver Davies, Penguin, 1994</li> <li>5) ブルーノ著、無限、清水純一訳、— 無限、宇宙および諸世界について、岩波書店、2009</li> <li>6) 上田閑照監修 — 人間であること、燈影者、2006</li> </ol>
<p><b>D. 医療及び公衆衛生関連の文献</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 井上栄著—感染症、中央公論社、1877</li> <li>2) スティーヴン・ジョンソン著、矢野真千子訳 — 感染地図、河出書房新社、2007 Steven Johnson: <i>The Ghost Map</i>. Riverhead Books, 2007.</li> <li>3) Peter Vinten-Johansen, Howard Brody, Nigel Paneth, Stephen Rachman, Michael Rip: <i>Cholera, Chloroform, and the Science of Medicine, A Life of John Snow</i>. Oxford, 2003.</li> </ol>

### Ⅲ 本論 1840-50年代におけるナイチンゲールの看護哲学と近代看護の形成

#### 1. ブンゼン男爵との出会い<sup>A-1)、3)、4)、5)、9)</sup>

1842年、ナイチンゲール(Florence Nightingale, 1820-1910)は、ロード・グレー内閣の前外相パーマストン(Henry John Palmerston, 1784-1865)の邸内食事に招かれた。その会席の場で、ナイチンゲールは、彼女よりも11歳年上で、アルフレッド・テニスンやウィリアム・M・サッカレイといった文学者と親交を持ち、自らも瞑想的な詩人として活躍していたリチャード・モンクトン・ミルنز(Richard Monckton Milnes, 1809-85)と出逢った。ミルنزはナイチンゲールの魅力に引かれ、その後ナイチンゲール家第二の邸宅エンブリー・ハウス(Embley House)に遊びに来るようになった。

家柄も教養も気品も性格もすべて申し分ないミルنزはナイチンゲール一家のお気に入りとなった。ナイチンゲールは、ミルنزが神学校設立や修道会復活などの英国国教会改革運動を支持していることを知り、また、既成の宗教観に囚われない自由な主義主張の持ち主であることを知って、彼に魅かれていった。

上流階級出身のミルنزには、英国の有力者や知識人と交際があり、その一人にブンゼン男爵(Christian Charles Josias, Baron von Bunsen, 1791-1860)がいた。ブンゼン男爵はプロシアの英国王室特使(Ambassador to the Court of St. James)として1841年からロンドンに在任していた。哲学や宗教思想にも深い知識を持っていた彼はドイツの哲学者、神学者そして歴史学者に精通していた。彼の住居カールトン・テラス(Carlton Terrace)は英国の多くの学者や知識人の集う場になっていた。

ナイチンゲールはミルنزからブンゼン男爵のことを聞き、1842年に彼の紹介を経て、カールトン・テラスへ出かけて行った。そして、ブンゼン男爵と出会うことになったのであるが、その時点からナイチンゲールは多くの思想家の書物に触れ、先人の偉大な思想を吸収し、看護への内なる情熱を高めていったのである。

『真理の探究』(*Suggestions for Thought by Florence Nightingale*)の *Commentaries* によると、ブンゼン男爵は、ドイツの神学者で神秘主義者のマイスター・エックハルト(Meister Eckhart, 1260?-1328)と地球回転説や無限宇宙論などを主張した神学者ジョルダノ・ブルーノ(Giordano Bruno, 1548-1600)などの思想家を高く評価し

ており、ナイチンゲールはブンゼン男爵を通してその二人の哲学者を知ったと書かれている。<sup>A-11)</sup>

エックハルトとブルーノの著書で現在入手できるのは、岩波書店から翻訳出版されている『エックハルト説教集』及びPenguin BooksのEckhart: *Selected Writings*で、ブルーノの著書は『無限、宇宙および諸世界について』のみである。しかし、その二冊だけでも、ナイチンゲールへの影響を窺い知ることは可能である。

その二人の思想家には極めて重大な共通点が存在していた。それは、いずれも地位の高い僧侶でありながら、その自由な思想故に異端審問の裁判にかけられ、拷問を受けたが、権力に屈することなく自己の自由な主張を堂々と貫いたという事実である。

真理と自由を全うして処罰された二人の生き方そのものに、ナイチンゲールは自分の境遇と照合して、共鳴していたのかもしれない。

ナイチンゲール自身、異端者の処刑台に立たされたような状況を体験していた。看護師への道を歩もうと志を立て、密かに実践していた彼女に、エンブリー・ハウスの夕食時に起こった1845年の出来事がまさにそれであった。

彼女が心から尊敬し、慕っていたソールズベリー病院(Salisbury Infirmary)のファウラー医師(Dr. Richard Fowler)夫妻がエンブリー・ハウスに訪れ、夕食を共にした時のことであった。ファウラー医師は以前から、看護師を目指す彼女の相談にのってやり、彼女の才能に気づいていた。食事の最中に、ナイチンゲールは両親にファウラー医師の下で本格的に看護の勉強したい、と打ち明けた。しかし、両親の反対は過激だった。驚いたファウラー医師は両親の反対意見に同調し、当時の看護師の程度の悪さを暴露してしまった。家族の反対ばかりでなく、信頼している人に裏切られてしまう結果になったナイチンゲールは痛烈な精神的打撃を受けてしまった。突然、彼女の看護師への夢は断たれ、絶望の淵に立たされたのである。

家族からまるで異端者のように扱われ、苦悩し、自虐的になって自殺しようとするまでに追い詰められていった。しかし、そうした苦しい時期に、「罪」や「悪」について深く考えるようになり、二人の自由な異端神学者の著書と出会うことができたことは、勇気を与えられ、彼女の思想形成に非常に意義のあることであった。

そこでまず、『エックハルト説教集』からナイチンゲール

ルの思想形成への影響を考えてみたい。

## 2. 『エックハルト説教集』にみる「自由」<sup>A-10)、11)、C-4)</sup>

エックハルトは、その説教集のはじめに次のように書いている。

聞きなさい。神と神の栄光のほか何ものにも自分自身にさえも目をとめない人こそ、すべてのわざにおいて、真に自由な人であり、いかなる商人的あり方にも縛られず、自分のものを求めることもない人なのである。神がみずからなすべきすべてのわざも縛られず、自由であり、自分のものを求めることを決してしないのと同じである。<sup>C-4) p. 15</sup>

それは、裏を返せば、神の業は常に無償であり、神に倣う人間の業は無償であるがゆえに真に自由なのである、ということになる。

また、エックハルトは「愛」について、次のように書いている。

神の掟は神の本性である愛と慈しみとからくものである。なぜならば掟が愛によるものでなければ、それはけっして神の掟ではありえないからである。神の掟は神の本性である慈しみであって、神の本性は神の掟において神の慈しみなのである。さて、神の本性である慈しみの内に住む人はだれでも神の愛の内に住む人である。<sup>C-4) p. 131</sup>

ナイチンゲールは、エックハルトのその言葉によって精神的な光明を見出すことができたと考える。「無償であるがゆえに自由」であるということと、「神の掟」は「愛と慈しみ」であること。それが故に人間も神に倣って愛と慈しみの内に住まねばならない。そして、その人は「神の愛の内に住む人」なのである。

「神の愛」を信じる人は真に「自由」である。それはまた、奉仕活動に励む修道女の根本的原理でもあった。ナイチンゲールは、エックハルトの「自由」の原理に強くひきつけられと同時に看護修道女たちの看護奉仕に深い関心を抱くようになった。カトリック修道会に入って、キリストに倣って貧しい病人の看護することを本気で考えるようになった。そして、その願いを心に抱くようになって、消えかけていた希望の光が彼女の心を満たしたのである。

## 3. ナイチンゲールを支えた根本思想<sup>A-10)、C-4)</sup>

ナイチンゲールは『真理の探究』において、次のように書いている。

苦しみや貧しさを耐え忍ぶものが、人間に内在する神の霊であること、それは明らかではないでしょうか。存在の法則に明示されているように、神の霊は正義と知と善、愛と慈しみの霊であるということ以外に、私たちは神の霊について、いったい何を知ることができるのでしょうか。あらゆる苦しみや貧しさは、これらの神の属性の反作用であり、否定であり、制限に他ならないのではないのでしょうか。<sup>A. 10) p. 291</sup>

「正義と知と善」そして「愛」と「慈しみ」こそが「神の霊」であるならば「苦しみ」や「貧しさ」は「神の霊」を否定するものであり、存在してはならないものなのである。英国の社会通念ではそれらは醜いものであり下品なものであるから社会悪として切り捨ててしまわなければならないものであった。ナイチンゲールにとってそうした「切捨て」は神の計画に反するものであった。彼女によると、貧民を切り捨てるのではなく、キリストに倣って、人は貧民の「苦しみ」や「貧しさ」をこの世界から取り除くように努力しなければならないのである。

溺れかけている人間が、同じ人間の知恵や優しさによって救われるのを目撃したとき、私たちはだからといって、人間を溺れる危険にさらした存在、すなわち神は善でありうるのかなどと、言ったりはしません。私たちは、神が救助者に愛の業のために溺れた人を救う能力を与えたこと、人間がその能力を発揮することによって、すなわち、『土の器』である人間のうちに現された神の知恵と愛とによって溺れかけた人が救われたことに、神に賛美するのです。<sup>A-10) p. 227</sup>

ナイチンゲールが言う「人を救う」ということは、対象者を個人的な憐れみから行うのではなく、神の愛の業を自らが代わって行うということである。か弱い一個の人間に、神が知恵と能力を与え、救いの業を成し遂げさせてくれるからできるのである。したがって、褒めたたえられるのは救助者ではなく、使命を授けた神である。

その根本にはエックハルトが説いている神の掟としての「愛」と「慈しみ」の原理が存在するのである。

ナイチンゲールはカトリックに惹かれ、改宗さえ考えながらも、カトリックの「恩寵と贖罪という教理体系」を真っ向から否定し、対立した。そのカトリックの教理体系というものは、人間を罪深い存在と決めつけ、悔悛して生きることこそが神の求める最も正しい生き方であるとして、神に対して罪を償い、許しを求めて生き、死後に至福の時が来るという教えを徹底して守らせようと

するものであった。

ナイチンゲールは人間の過ちを「罪」と考えずに一つの経験と考える。失敗や過ちを経験することによって、神は人間を善の方向へと導くものなのである。彼女は次のように言っている。

人間は経験によって向上します。神と人間の内にある聖霊とは、悪を善に変えるように常に働いているのです。・・・(中略)・・・正しく解釈された神の支配の主要原理とは何かといえば、人間は知識と進歩と人類に対する正義をやがて成就すること——すなわち、人間は自らの過ちに苦しむが、それは神の怒りのせいではなく、私たちが神と名づける「善と知の霊」が、私たち自らの行いを通して、私たちの幸福である正義へと導いているからなのです。A-10 p. 238

ナイチンゲールは、この現実の世界から不幸をなくし、幸福な世界にするために、神が人間に授けた使命を果たすことができるその人は看護師において他に存在しないと考えたのである。自己の名声欲や権力欲を捨てさり、神のみ旨にそって働くことこそが彼女の言う「神の支配の主要原理」であり、彼女の看護哲学なのである。

#### 4. ブルーノの『無限、宇宙および諸世界について』の影響 A-1)、3)、4)、10)、C-5)

ミルンズはナイチンゲールに何度となく結婚を申し出た。彼女は、その度に、引き延ばし、結局七年目の1849年に、はっきりと断ってしまった。家族同然の付き合いがありながら、返事を待たせるだけ待たせておいて、結局彼の求婚を断ってしまったのである。このことに対する家族や知人たちからの風当たりは大変なものであった。

当時の英国の中流以上の家庭では、結婚して幸せな家庭を築くことこそが女性に課せられた最大の使命であり、最高の幸福であった。それ以外のことを求めることは許されなかったのである。特に、上流家庭の淑女が、結婚よりも貧しい病人のために働きたいという願望を優先させるなんてことはあってしかるべきことではなかった。それは、両親の期待を裏切ることであり、社会の慣習や通念に対する反逆ともとられたのである。当時の社会において、ナイチンゲールは心ならずも許されざる選択をしてしまったのである。

それでも、ミルンズには理解してもらえると信じていたナイチンゲールは幾度かパーティの席などで、彼に自己の思いを語ろうとした。しかし、ミルンズは彼女から

目をそらし、彼女を避けた。その後ミルンズは他の女性と結婚してしまう。

ナイチンゲールは結婚を断るという行為から女性を取り巻く目に見えない社会の壁にまともにぶち当たってしまったのである。

その求婚拒絶の理由としてナイチンゲールが言ったことを考えるとき、彼女は異端者ブルーノの本を読んでいたのではないかと思えるのである。

ブルーノの著書『無限、宇宙および諸世界について』において、彼は「世界の中心はひとつではない」と主張している。彼によると、宇宙は無限の広がりであり、世界の中心はそれを定める場所によって異なり、その場所は無限に存在する。中心をどこに据えるかで世界は無限に変化するのである。

ブルーノのその世界相対性の理論はキリスト教世界で絶対的であった神とその世界の唯一性を完全に否定してしまうものであった。16世紀、神の唯一絶対性と権威を最も重んじるカトリック教会は神学者ブルーノを異端審問にかけ、火刑に処した。

世界が相対的であると主張するブルーノの理論はナイチンゲールの思想にも深い影響を及ぼしたと考えられる。その影響を最も受けていると思えるのが、ミルンズに対する求婚拒絶の理由である。

ナイチンゲールは『真理の探究』において次のように書いている。

満たされることを求めている私の知的な面は、彼のその満足を見出すだろう。満たされることを求めている私の情熱的な面も、彼にその満足を見出すだろう。けれども満たされることを求めている道徳的で活動的な面は、彼の人生に見出すことはできない。

A-10 p. 257

ナイチンゲールは当時の社会通念を絶対視することはなかった。上流家庭の淑女が取るべき態度を完全に無視し、家族や社会からの柵を取り払い、客観的に、極めて論理的にミルンズと自己との関係を見つめ、分析していたのである。一つの「面」からだけではなく、世界の中心を移動させながら「知的な面」、「情熱的な面」、「道徳的で活動的な面」といった三様の「面」を考え、仮想世界をつくりだした。それぞれの「面」から、現在と未来の二人の関係を分析し、総合的に判断したのである。まさにブルーノの説く「世界の中心は定める場所によって異なり、その場所は無限に存在する」理論を実践したか

のようである。

こうした世界の客観的分析から構築される仮想世界は、上流家庭を縛り付けている固定観念の柵の中で生きている女性からは、まさに異常者の世界に思えたに違いない。

ミルズは英国の既成社会においては、家系も教養も申し分ない男性であった。しかし、ナイチンゲールが求める理想からは遠い存在であった。彼女は、彼が女性というものを旧態依然たる固定観念の中で捉えていること見抜いていたのである。そして、彼女が神から授かった天命を成し遂げるために、一緒に協力してくれるような男性ではないと判断したのである。彼女は次のように書いている。

彼の人生に耐えられないことはわかっている。今までと同じことを継続、別の生活をするという希望もないままに、今の生活にさらに輪をかけたような人生に釘づけにされるのは耐えられない。真実で豊かな生活を独力で築けるチャンスを自ら逃すのは、自殺行為のように思える。 <sup>A-10) p.257</sup>

上流階級の人々にとって「豊かな生活」とは、経済的にも物質的にも恵まれた生活を意味するであろうが、ナイチンゲールの場合は神の御心すなわち「神の霊」に心が満たされて生きることなのである。社交界を好み、その中で人に愛されていることを喜びとしている人々の生活には希望が持てない。そういう世界に自ら妥協し、入っていくことは自殺行為に等しいとナイチンゲールは考えたのである。

ナイチンゲールは、ブンゼン男爵によって紹介されたブルーノの著書によって、自らを臆することなく異端者の列に加えることによって、天命を全うするべく強い意志の力を培ったのである。

ナイチンゲールが看護修道女と一線を画していたのはその鋼のような意志の力である。

## 5. 科学的看護への認識 <sup>A-1)、3)、5)、4)、9)、C-1)</sup>

1842年頃から英国全体を襲った不景気は都市や地方の村にまで波及し、貧民で溢れた。貧しい病人の中に積極的に入っていき看護した時、ナイチンゲールはカトリックの看護修道女が持っている資質すなわち「慈愛」と「忍耐」が看護にはもっとも求められるものであるという認識に達していた。

しかし、彼女はリーハーストの近くに住んでいた貧しい女性が、無知な看護師のいい加減な薬剤投与によって死んでしまうという痛ましい出来事を見た。さらに、1845

年には祖母や乳母の病に直面した。

ナイチンゲールは祖母ショア夫人(Mary Shore)と最愛の乳母ゲール夫人(Frances Gale)を献身的に看病した。ショア夫人は看病の功あって回復したが、ゲール夫人は亡くなってしまった。ナイチンゲールは母ファニーからゲール夫人の看病を許され、エンブリー・ハウスでゲール夫人の最期を看取った。

ナイチンゲールは、その後エンブリー近隣のウェロー・ヴィレッジ(Wellow Village)で貧しい病人の看護に献身的に働いた。臨終や難産にも立会う中で彼女が気づいたことは、看護をするのは女性の仕事であるが、その女性の誰一人として看護の知識がなく、訓練を受けたことがないという事実であった。

ナイチンゲールは看護を実践する上では「慈愛」や「忍耐」だけでは足りないことを知った。看護に必要な知識や技術を身に付けなければならぬと痛感したのである。

## 6. カイザースヴェルト学園 <sup>A-1)、3)、4)、5)、9)、14)</sup>

ブンゼン男爵夫妻との親交は深まり、ナイチンゲールはドイツですでに始まっていた看護師育成の新しい動きに関する情報を提供してもらえるようになっていた。その情報というのはカイザースヴェルト・ディーコネス学園(the Institution of Deaconess at Kaiserswerth)、通称「カイザースヴェルト学園」に関するものであった。

カイザースヴェルト学園はドイツ福音主義教会のフリートナー牧師(Theodore Fliedner)が1833年に刑務所を出たばかりの女性を救護し、更正させる施設を建てたのが始まりとされている。フリートナー牧師はさらに1836年に幼児学校と病院をつくり、教師や看護師を養成する訓練施設を併設した。

ディーコネスというのは、学園施設の中で共同生活を送りながら奉仕活動の修練と堅信式を終えた女性に与えられる会員の称号であった。修道院と違っている点は持参金や請願宣誓式といったものがないということであった。全寮制の修練期間は1年から3年とされており、修了後町の救貧院や病院に派遣されて奉仕活動に携わった。

ナイチンゲールはその学園のことを想像し、留学したいと考えた。しかし、家族の強力な反対にあってしまった。折しも、1847年秋、ナイチンゲールはローマへ旅だった。バチカンの礼拝堂や天井画に心酔し、幸せな時を過ごした。そのローマで、彼女は運命的な出会いをした。それは、ピール首相政権下で将来を嘱望されていた若い政治家シドニー・ハーバート(Sidney Herbert)とその妻エ

リザベス(Elizabeth)との出会いであった。

ハーバート夫妻は敬虔なキリスト教徒で、貧しい人々の生活の改善に努力し、低賃金の貧困労働者のための保養施設建設に多額の資金を寄付していた。同じ目的を抱く有力者に出会えたことはナイチンゲールにとって幸運であった。その後、ハーバート夫妻と親密になったが、夫妻からもカイザースヴェルト学園への留学を薦められた。

ブンゼン男爵夫妻やハーバート夫妻、さらにはナイチンゲール家と親交があったブレースブリッジ夫妻(Charles and Selina Bracebridge)などがナイチンゲールのカイザースヴェルト留学を後押ししてくれた。特にブレースブリッジ夫人は母ファニー(Fanny)と親友であったが、ファニーとは全く違った考え方を持っていて、貧しい病人のために働きたいというナイチンゲールの意思を理解し、共感していた。親友の後押しに彼女の両親は声を荒立てて反対することができなくなった。ナイチンゲールのカイザースヴェルト行きはもう手の届くところまで来ていた。

しかし、ドイツに革命が起き、カイザースヴェルト留学は断念せざるを得なかった。望みを断念したナイチンゲールは貧民学校の教師などをしたが、うまくいかず自己嫌悪に陥ってしまった。しかも、彼女の夢想癖がひどくなり、絶え間無い精神的葛藤にさいなまれ続けた。不眠と疲労に悶え、精神的虚脱状況は続いた。そうした状況の中で、ハーバート夫妻や世界で最初の女医ブラックウェル(Elizabeth Blackwell)に力づけられた。

ドイツの状況が落ち着くと、再びカイザースヴェルト留学が復活した。父ウィリアム(William)がようやくナイチンゲールに理解を示し、資金援助の約束をしてくれた。そして、1851年夏にナイチンゲールの願いは実現することになった。しかし、それでも母ファニーの偏見は根強く、一族にはナイチンゲールの姉パースノウプ(Perthenope)の病気の療養にドイツへ姉のナイチンゲールが同伴するという別の理由をつけて本来の目的を隠したほどであった。

1851年にナイチンゲールによって書かれた『カイザースヴェルト学園によせて』<sup>A-5</sup> 第1巻 p.3-34 は単に同学園の報告にとどまらず、一個の人間として、既婚、未婚に関係なく、女性が自由に生きがいを持って生きるナイチンゲール自身の力強い宣言でもある。

カイザースヴェルト学園に関する報告では、病院はデーコネスのための修練の場であった。フリートナー牧

師を中心にすべての看護師が「同一の目的——一つの精神、ひとつの愛、唯一の主に連なって」おり、神の「仕事」を全うするべく働いているということに終始していた。

カイザースヴェルト学園での体験は信仰に基づく活動のすばらしさをナイチンゲールに教えてくれただけではなかった。精神的な修練が徹底してなされ、看護奉仕活動には優れた成果をあげていた半面、病院看護に関する重大な問題をナイチンゲールに教えてくれたのである。

それについてナイチンゲールは次のように書いている。

・・・もし誰かが病気ならば、私は医師にそこに来てもらうが、医師はすぐに問題の潰傷を切開して治してしまうので、もう一度来訪するというような面倒なことは起こらない。このような種類のかかわり方はなんと嘆かわしいことか。私は乱雑で不潔な状態や愚かしい習慣や整理が行き届いていない有様を目撃する。しかし私はそれにどう手助けできるのかわからない。私には彼らをとがめる権利がいったいあるだろうか？ 私自身どのようにすればもっとよい状態にできるかを教えられないでいるのに。私は疾病を見る、しかし、どう取り計らってよいかかわからない。それにもかかわらず、それこそ、身体への働きかけを通して患者のころへの道を見つけるために私がしたいと思っている、まさにそのことなのに。・・・<sup>A-5</sup> 第1巻 p.29-30

ナイチンゲールが書いている「身体への働きかけ」とは何か。これは別の言葉で言うと医学的知識のことを指しているのではないだろうか。カイザースヴェルト学園で彼女は信仰に基づく慈善団体の救済活動の限界を肝に銘じたにちがいない。看護は心のふれあいだけでは足りない。すなわち、「慈愛」や「奉仕」の精神は必要であるが、それだけでは看護とはならないのである。手術で治った患者が敗血症や感染症のため死んでいく現実に対して、何かなす術をもっているのが看護ではないのか、ということを感じたのである。衛生的知識、人体の科学的な理解と知識、薬剤の知識などがナイチンゲールの考える看護には必要だったのである。

## 7. キングス・カレッジ病院<sup>A-1)、3)、4)、8)、15)、B-7)、C-1)</sup>

1853年、ナイチンゲールはハーバート夫妻の紹介で「病める貴婦人のためのアッパー・ハーレイ・ストリート病院」(The Upper Harley Street Establishment for Gentlewomen during Illness)の看護師兼指導監督官と

して働くことになり、看護師教育と組織的な看護体制確立のために積極的に病院の改革を行った。そして、優れた足跡を残し、高い評価を得た。しかし、ナイチンゲールの考える看護はその程度ものではおさまらなかった。

ナイチンゲールが求めたものは、公立の病院よりもむしろ修道会組織の方であった。よき看護師育成には、精神面ではキリスト教原理に基づく教育が欠かせないことを彼女は知っていたからである。しかし、同時にそれだけでは足りないことも分かっていた。病院や広くは地域社会のために、看護師には科学的な技術や知識が求められる時代になっていることを自覚していたのである。

ナイチンゲールはキングス・カレッジ病院(King's College Hospital)に惹かれていた。その病院は彼女の理想とする病院運営と看護体制を整えていたからである。

キングス・カレッジ病院は「聖ヨハネの家女子修道会」(St. John's House Sisterhoods)との深い関わりを持っていた。1848年に、医療の改革者であり、キングス・カレッジの生理学と解剖学の教授ロバート・ベントリー・トッド(Robert Bentley Todd)は、「聖ヨハネの家女子修道会」に「病院と家庭そして貧者のための看護師養成所」(the Training Institution for Nurses in Hospitals, Families, and for the Poor)を創設し、内科医による講義を含めて看護と病院管理を2年かそれ以上の期間で集中的に訓練するプログラムを確立した。

女子修道会と大学病院が一体となって医療の革新に応じた新しいタイプの看護師と病院管理者を輩出することを目指していたのである。

1854年、ナイチンゲールはキングス・カレッジ病院で、名高いポーマン医師の下で手術の助手を務め、医学の新しい時代をその手で感じ取った。また、ポーマン医師は彼女の優れた才能を知り、当病院の看護師長になることを薦めた。

願ってもない機会を得たナイチンゲールは、母親と姉の猛反対を押し切って、キングス・カレッジ病院に務める決意を固めたのである。しかし、クリミア戦争に英国が参戦し、戦時陸軍大臣ハーバートからの戦時下のクリミア半島に看護師団長として赴く要請を受けたのである。

## 8. エリザベス・フライ <sup>(9-1)、2)</sup>

19世紀前半、英国では、カトリックが解放されると、カトリックの神秘性と儀式性を重んじるミサに惹かれてカトリックへの宗旨替えをする風潮が高まっていった。英国国教会の中にはカトリックへの回帰運動さえ起つて

いた。また、カトリックの修道院の復活に危機感をつのらせた、英国国教会と他の宗派を含めたプロテスタントは、従来どおりの福音主義を貫きながら、修道会を復活させ、カトリックに匹敵する社会奉仕活動を展開しようとする動きに出た。

英国で、最初に女子修道会をつくり、貧しい人々の救済に積極的にのりだしたのはクエーカー教徒(Quaker)と呼ばれているプロテスタントの一派であった。また、英国で最初の看護教育をおこなったのもこの教徒であったとされている。

その中心的な働きをしたのはエリザベス・フライ(Elizabeth Fry)であった。彼女は、ドイツのテオドル・フリートナーがリュセルドルフに設立したカイザースヴェルト学園に倣って、1840年ロンドンに「看護修道女会」(the Institution of Nursing Sisters)を創設した。

フライはナイチンゲールがカイザースヴェルト学園に行った年より10年も早くその学園との交流を持っていたのである。フライの「看護修道女会」はカイザースヴェルト学園にならってディーコネス制度を取り入れて、看護師を育成した。

英国国教会以外のプロテスタントであれば教派は問わず看護修道女会に入会でき、フライのもとで看護教育を受け、さらにロンドンのガイ病院(Guy's Hospital)で医療訓練を受け、ディーコネスとなることができた。ディーコネスは看護師として病人の家庭への訪問看護を行った。

クリミア戦争が始まるとフライは看護の指導者としてナイチンゲールの配下に入ったが、ナイチンゲールの良き理解者となって彼女を支えた。

## 9. バーモンジー女子修道会 <sup>A-8)、14)、B-1)、2)、3)、4)、6)、7) C-1)、2)、3) D-1)、2)、3)</sup>

### 1) バーモンジーという地域

バーモンジー(Bermondsey)は19世紀ロンドンで汚染された下水溝に囲まれた最下層の街として名高いジェイコブス・アイランド(Jacobs Island)と隣接する皮革業の町であった。その下層階級の人口密集地も12世紀に遡れば、まったく違った様相であった。小川が流れ、修道院があり、僧侶が住む風光明媚な村であつたらしい。テムズ河へ注ぎ込む小川とその周辺には水車小屋が立ち並び、修道士たちが粉をひいていた。

19世紀になると小川は下水溝に変わり、ロンドンでも有数の疫病蔓延地域と化した。バーモンジー地域一帯にはアイルランド人が15パーセントを占めていた。アイル

ランド人はジャガイモ飢饉などで逃れてきた難民が多く、ロンドンの最下層を形成していた。ヘンリー・メイヒューは、その著書『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』の第一章に「バーモンジーのコレラ汚染地区」という見出しを掲げて、当時の汚染と悪臭に満ちた実情を詳細に報じている。<sup>B-3)</sup>

## 2) バーモンジー女子修道会の開設

貧困と疫病の蔓延する地域に、「バーモンジー女子修道院」(Bermondsey Convent of Mercy)は創設された。

この女子修道院は、英国に長い間カトリックを禁じてきた「異教徒刑罰法」(Penal Code)が1829年に「カトリック解放令」(Catholic Emancipation Act)によって正式に撤廃されて以来、1838年にはじめて創設されたローマ・カトリックの修道院である。その大元はアイルランドの「慈悲の聖母童貞会」(The Sisters of Mercy)であった。

厳かで威風あるカトリックの請願式が復活し、良家の子女たちの憧れとなった。シオバン・ネルソンによると、300年振りになる修道女受け入れの請願式に伯爵令嬢が混じっており、彼女は絹とダイヤモンドで装っていたということである。それは「宗教的儀式というよりも上流階級の結婚披露宴にも似た趣だった」<sup>C-1) p.122</sup>とシオバン・ネルソンは書いている。規模で豪勢な請願式はマスコミでも大きく取り上げられ、カトリック再興に向けて一大イベントとして報じられた。

荘厳なミサに華やかさが加えられた修道請願式の模様が新聞で大々的に取り上げられ、上流階級の淑女たちが修道院へ押し寄せてきたということである。

貧しいアイルランドからのカトリックの移住者が多く住んでいる貧困者の地域に、まったく対照的に、カトリックの「バーモンジー女子修道院」が開院したのである。華やかさに憧れた子女たちが本当に貧しい人々のために神の手足となって働くことが出来るのであろうか。この予測される矛盾はこの修道院のその後に大きな影を落とすことになる。

## 3) バーモンジー女子修道会の「労働」

その修道院の修道女たちの仕事は修道院長マザー・メアリー・ムーア(Revd. Mother Mary Moore Clare)の指導の下、ロンドンの貧しい人々のために看護奉仕活動を行うことであった。

シオバン・ネルソンによると<sup>C-1) p.122</sup>、学校、病院、働く母親のための託児所、ホームレスの夜間宿泊所などを

つくり、さらに貧しい病人の訪問看護などに奉仕活動すなわち「労働」に励んだと書かれている。

社会的地位の高いプロテスタントの家庭から子女を改宗によって集めたカトリック修道院であったのを鑑みると院外の社会奉仕活動すなわち「労働」に修道女全員が積極的に従事していたというのはいささか不思議な気がする。アイルランドという土壌と古い慣習が生み出した、聖職者といえども、「労働」を重んじる独特な信仰の形態は、豊かなイングランドの美しい大聖堂の居並ぶ環境の中で思い描いた修道女の理想像とは相容れられないものであったに違いないからである。

シオバン・ネルソンによると、優れた指導者マザー・ムーアによって期待された通りの奉仕活動が展開された。しかし、彼女がアイルランドへ戻って不在になって、イングランドの改宗者にバーモンジー女子修道会が任されるようになると雰囲気は一変したということである。修道女たちは「労働」を捨て、修道院にこもって祈り、感想に耽るようになったということである。

マザー・ムーアは再び呼びもどされ、本来の修道院の奉仕活動が再開された。アイルランドに本拠地を持つ修道院の方針は豊かなイングランド出身の修道女には受け入れがたいものがあつたが、しかし、マザー・ムーアの指導力はその矛盾を見事に克服し、問題なくその後の運営がなされたということである。

1854年、ナイチンゲールはクリミア戦争の看護師団長に任命され、看護師の選択を任された時、38名中マザー・ムーアも含めて5名の看護修道女を「バーモンジー女子修道院」から選抜した。英国プロテスタント修道女や貴婦人が中心の看護師集団にカトリックの修道女を入れることにカトリック側からもプロテスタント側からも批判が出た。特にカトリックへの協力依頼は一筋縄に行くことではなかった。しかし、ナイチンゲール自身がダブリンのマニング(Henry Manning)枢機卿や「慈悲の聖母童貞会」院長キャサリン・マコーリー(Mother Catherine McAuley)に働き掛け、さらに、クリミア戦争には英国兵士の数のほぼ三分の一がアイルランド出身のカトリックであったこともあり、許可を取り付けることができた。その結果、カトリックからは「バーモンジー女子修道会」の他に、ノーウッドの身障者施設で奉仕している修道女にも応召してもらうことができた。

看護修道女としてナイチンゲールの配下に入ったマザー・ムーアは祈りよりも労働を第一に、ナイチンゲール

の考えを良く理解し積極的な協力を惜しまなかった。

カトリックの看護修道女から選ぶということは大変な冒険であったが、ナイチンゲールは大勢の奉仕者を募るよりは少数の良き理解者、良き協力者を得る方が得策であると考えていた。

『真理の探究』の中で、ナイチンゲールは「修道会にはある特異な人格が存在し、人類全体や他の人々の努力に対する関心の欠如、修道院長をある考え方に導く狭量さが存在する」<sup>A-10 p. 340</sup>と書いている。修道院の方針と院長の指導方針や指導力こそが野戦病院の看護においても良い結果をもたらす不可欠な条件であると考えていたのである。

ナイチンゲールにとって、軍事病院で一緒に働けないのは、修道院でも神の前で自らを卑しめて罪の許しを願って祈るような修道女や過去の罪の十字架に耐えることが真理であると信じ、十字架の重荷からの解放を願って祈ったりする修道女であった。<sup>A-10 p. 342</sup>

そのような祈る修道女に対してナイチンゲールは、下水を掃除してコレラを予防することは宗教的な行為であるが、神頼みの祈りは宗教的行為ではないと主張した。そして、神の目的は「人間が生活と環境を変えることによって、外的世界が内的世界に寄与し、神と一つになること」<sup>A-10 p. 332</sup>であると断言した。また、「神」に対して「完全なる服従を達成しつつ一人一人が個性を發揮できる自由を獲得することは、明らかに聖なる統治者である神のみならず、人間の目的でもあるにちがひありません。」<sup>A-10 p. 339</sup>と書いている。

しかし、スクタリにおいて「神」に対して「完全服従」の意味は正しく伝わっていなかったと考えられる。「神」は普通キリスト教であれば「主キリスト」あるいは「全能の父なる神」を指すであろうし、プロテスタントであれば「聖書」の教えであるかもしれない。ナイチンゲールの「神」はそうした神ではない。ナイチンゲールにとって「神」とは、祈りの対象として病人の外部に存在するのではない。彼女の言う「神」とは負傷や疫病に苦しむ病人であり、負傷兵である。クリミア戦争後、彼女は若い看護師に宛てた『新訳・ナイチンゲール書簡集』<sup>A-14</sup> (*Florence Nightingale to Her Nurses*, Macmillan)で病院を「神の王国」と呼んでいる。

看護する者は患者の苦しみを取り除いてやることだけを考え、患者の環境を整え、衛生管理をし、平等に看護を行うこと、それこそが「神」への完全なる服従の意味なのである。スクタリでは負傷兵一人でも多く救うこと、

このために組織的な管理体制を確立し、一体となって協力し合う必要があった。

しかし、貴婦人から選ばれた看護師の中には軍隊の規律に従えない者が多く、また、看護修道女の中には負傷兵の病床に侍って祈るだけの者、自分の所属する修道会の院長の言うことだけを守る者、宗教上の主義主張の違いから大切な目的を見失う者、患者を差別する者、などがいたのである。

ナイチンゲールが選んだ看護師 38名のうち最後まで信頼でき、残った者は16名にすぎなかった。後からハーバートが選んで送り込んだ看護師はさらにひどかった。マザー・ムーアのようにナイチンゲールの考えを理解し、同じ地平に立って働いた修道会の指導者はエリザベス・フライを含めて数名であった。ナイチンゲールの看護哲学を正しく理解し、遂行できた人はわずか一握りの人たちだけであったのである。

#### IV 結論

ナイチンゲールは近代看護の創始者であるが、しかし、何の下地のないものから天才的な力で突然創り出したものではない。英国において、近代看護はナイチンゲールが物心ついた頃にすでに芽生えていたのである。産業都市の拡大と下層労働者の増加は救貧院施療病院の拡充と総合病院の増築拡張を余儀なくしていた。

また、カトリックが解禁され、カトリックの修道会の活躍に刺激された英国国教会は女子修道会を復活させた。医学校が病院に併設され、看護に奉仕する看護修道女や慈善団体が生まれた。

女子修道会は看護修道女を病院に派遣して、医師の下で病院看護を確立する機運もあった。ナイチンゲールがソールズベリー病院で医師の下で看護を勉強しようとしたのも彼女の独創的な判断からではなかったのかもしれない。彼女の家族の仕打ちはそうした機運の中にナイチンゲールが入っていくことを妨げてしまったのである。彼女が念願だった看護師としての仕事に就けたのは1853年になってからのことである。

その10年以上もの遅れは、かえって彼女にとって幸いしたと言えるかもしれない。なぜなら、閉鎖された不自由な環境の中で、公衆衛生学や統計学の資料や学会誌あるいはカイザースヴェルト学園の機関誌、さらにはネオ・プラントン学派の著書や会誌を読みあさることができたからである。貧民への奉仕活動としての看護の域を超えて、大きな知識と深い思想に支えられた近代的な看

護の基礎がその時に培われたのである。

ヴィクトリア朝時代は産業だけが急成長したばかりでなく、医療面でも大きな変革があった。麻酔の発明と外科手術の進歩である。従来の死を待つ館としての病棟は術後の回復を待つ場が変わったのである。病院の看護も衛生管理から空調に至るまで、感染症を防ぎ、患者の回復を早め、助けることが要求されるようになったのであ

る。ナイチンゲールはそうした時代を先取りする看護を確立させたのである。しかし、同時に、ナイチンゲールが『新訳・ナイチンゲール書簡集』で若い看護師に向かって説いたキリスト教信仰に基づく看護のあり方は、今日科学万能の時代にあっても忘れてはならない看護の原点でもあると確信する。

〔 受付 2011. 8. 9  
採用 2011. 12. 21 〕

## How did Nightingale form Her Nursing Philosophy between 1840s and 1850s, and establish a Modern Nursing?

Satoshi TOKUNAGA, M.A.<sup>1)</sup>

Nightingale's encounter with Baron von Bunsen brought her a rapid development of thought. He had such a rich knowledge about philosophy, religion, theology, and history that he could give good advices on various books to Nightingale. She could form the most important heart of her nursing theory through radical thoughts of Bruno and Eckhalt introduced by Baron von Bunsen. Although Bruno and Eckhalt were both theologians, they were brought to the Inquisition and burned as heretics.

Moreover, Mrs. Bunsen gave Nightingale valuable pieces of information about the *Institution of Deaconess* at Kaiserswerth, which kindled Nightingale's enthusiasm for nursing.

In the mid-nineteenth century, both Protestant and Catholic established women's monastic orders to train nursing sisters of hospital and home visit. Elizabeth Fry who belonged to a protestant order, established the *Institution of Nursing Sisters* in London after the model of the *Institution of Deaconess* at Kaiserswerth. Mother Mary Moore who managed the Bermondsey Convent of Mercy trained the sisters to give relief to the poor. Both of them did not only promote friendship with Nightingale and helped her during the Crimean War, but also they continued to suggest to her how nursing should be after the war.

In 1854, Nightingale had an opportunity to help Dr. Bowman with his performing an operation at King's College Hospital. Since then she came to think about what nurses should do in an age where medical treatment had advanced. And experiences of the Crimean War made her keenly feel the importance of the hospital nursing to prevent patients from infections.

It is not too much to say that dualism, a spirit of service such as nursing sisters and a scientific approach to the patient's health, formed Nightingale's nursing theory. I feel convinced that modern nursing was produced from Nightingale's conflict and her conquest of the dualism.

**Keywords: Baron von Bunsen, the Institution of Deaconess at Kaiserswerth, hospital nursing, nursing sisters, modern nursing**

---

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing